

「第1回産業日本語研究会・シンポジウム」の開催に ついて

平成22年2月

産業日本語研究会世話人会

顧問：長尾 真 (国立国会図書館)

代表：井佐原 均 (豊橋技術科学大学)

辻井 潤一 (東京大学)

橋田 浩一 (産業技術総合研究所)

山崎 誠 (国立国語研究所)

隅田英一郎 (情報通信研究機構)

横井 俊夫 (日本特許情報機構)

1. 開催趣旨

社会の情報化が進展していますが、日本における情報伝達の基盤となる言語は、いうまでもなく日本語です。一方、グローバルな経済社会での情報の多くは、事実上の世界標準言語といえる英語によって伝達されています。米欧先進国は、情報伝達言語の英語への標準化に対応するために、英語を母語としない人たちを対象とした英語教育の仕組みづくりや、英語を他の言語に翻訳しやすくするための取組みを多く行ってきました。

我が国においても、日本語を客観的に分かり易く用いるための努力が各方面で行われてきました。例えば、使用される用語の規定を中心にした産業界各分野における努力、日本語テクニカルライティングや日本語テクニカルコミュニケーションに関する関連団体の努力、日本語ワープロや機械翻訳などの日本語処理技術に関わる分野における努力などです。

我が国の経済の活性化と国際競争力の強化が以前にも増して叫ばれる今、産業にまつわる情報を表現する日本語を、これまで以上に、情報伝達力と情報発信力が強化された日本語に変革することが必要です。今まで各方面で行われてきた、日本語を客観的に分かり易く用いる努力の成果として得られた多くの知見の蓄積を体系的にまとめ上げることが緊急の課題となっています。

そして、今、日本語に関する多くの知見や日本語処理技術の蓄積をまとめあげることにより、かつて英語圏で試みられた Controlled English のような制限言語の枠を超越し、かつ、情報伝達力と情報発信力が強化された新しい日本語の枠組みを作り上げることができる時期に来ています。

このような現状認識に立ち、産業界・科学技術分野における情報発信力や知的生産性の飛躍に貢献するとともに、わが国産業界全体の国際競争力の強化に資するような新しい日本語の枠組みのあり方について総合的な議論を行うために、シンポジウムを開催いたします。

「産業日本語」とは、情報を正確に伝達でき、かつ、コンピュータ処理されやすいように情報伝達力と情報発信力を強化した、産業や科学技術の記述に用いられるべき、新しい日本語の枠組みです。

このような「産業日本語」を検討するにあたっては、医療分野や司法分野など他分野における理解しやすい日本語の使用に関する取組みと密に連携することはもちろん、言語関連分

野にとどまらない様々な研究分野の方々、言語関連ビジネスを展開されている企業の方々、関係府省庁の方々との協調が不可欠です。

本シンポジウムでは、様々な分野における理解しやすい日本語の使用に関する取組みについてご紹介させていただきます。そして、自然言語処理、言語学、知識処理、日本語を用いた言語サービス、言語ビジネスといった日本語に関わる各界の有識者が、産業用文書の作成に適し、産業分野・科学技術分野における知的生産性の飛躍に貢献すべき「産業日本語」のあり方について議論し、その研究・開発・普及活動を先導する場としての「産業日本語研究会」の発足を提案させていただきます。

本シンポジウム、そして、「産業日本語研究会」が、関係各位の叡智を結集し、我が国の経済の活性化と国際競争力の強化に資する「産業日本語」の研究・開発・普及に向けた活動を支援する場となるように、皆さまのご参加をお願いいたします。

2. 今後の活動について

(1) 産業日本語シンポジウムの開催

産業日本語に関する研究成果や活動成果を発表・情報共有する場として、年に1回程度シンポジウムを一般公開形式で開催します。

主催：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN）

言語処理学会

一般財団法人日本特許情報機構（Japio）

(2) 産業日本語研究会 Web サイトの開設と運営

産業日本語研究会の活動スケジュール、情報交換、研究会成果の公表等を行うために産業日本語研究会 Web サイトを開設・運営します（予定）。

(3) その他

ALAGIN「産業日本語推進部会」、言語処理学会、Japio 等の各団体は、各々、産業日本語に関する研究活動を進めることとします。

各団体における活動については、産業日本語研究会 Web サイト上で、その研究成果の発表・情報交換等を行うこととします。

以上

事務局担当：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN） 事務局

第1回産業日本語研究会・シンポジウム

主催：高度言語情報融合フォーラム (ALAGIN)、言語処理学会、日本特許情報機構 (Japio)

後援：総務省、経済産業省、特許庁、国立国語研究所、情報通信研究機構、工業所有権情報・研修館、情報処理学会、人工知能学会、アジア太平洋機械翻訳協会

日時：2010年2月24日 13:00-17:30

場所：東京大学 情報学環・福武ホール ラーニングシアター
(東京大学 本郷キャンパス)

目的：産業日本語研究への参加の呼びかけ

参加費：無料 (事前登録制)

プログラム：

- | | | |
|-----|-------------------------------------|-------------|
| (1) | 開会あいさつ | 13:00-13:10 |
| | 橋田浩一 言語処理学会副会長／産業技術総合研究所社会知能技術研究ラボ長 | |
| (2) | 基調講演 | 13:10-13:40 |
| | 産業日本語を育てよう 長尾 真 国立国会図書館長 | |
| (3) | 招待講演 | 13:40-14:25 |
| | 言語学と機械翻訳をつなぐ語彙意味論 影山太郎 国立国語研究所長 | |
| (4) | 招待講演 | 14:25-15:10 |
| | 法廷用語を市民の手に 酒井 幸 弁護士 | |
| | ・・・日弁連における日常語化プロジェクトの経験から | |
| 休憩 | | 15:10-15:25 |
| (5) | 取組・研究事例の紹介・総合討論 | 15:25-17:30 |
| | コーディネータ 井佐原 均 豊橋技術科学大学教授 | |
| ① | 日本語処理技術の研究開発における特許情報の可能性 | 15:25-15:45 |
| | 藤井敦 東京工業大学准教授 | |
| ② | 病院の言葉を分かりやすくする提案 | 15:45-16:05 |
| | 田中牧郎 国立国語研究所准教授 | |
| ③ | 特許版・産業日本語と機械翻訳向け特許明細書ライティングマニュアル | 16:05-16:25 |
| | 渡邊豊英 Japio 特許情報研究所調査研究部長 | |
| ④ | 産業情報としての特許情報と産業日本語 | 16:25-16:45 |
| | 横井俊夫 東京工科大学名誉教授／Japio 特許情報研究所 顧問 | |
| ⑤ | 総合討論 参加者全員 (会場含む) による総合討論 | 16:45-17:30 |

※ シンポジウム終了後、懇親会 (参加費¥1000) を開催

プログラム詳細

1. 開会挨拶 [13:00-13:10]

橋田浩一（産業技術総合研究所 社会知能技術研究ラボ長）

【基調講演】

2. 産業日本語を育てよう [13:10-13:40]

長尾真（国立国会図書館長）

【招待講演】

3. 言語学と機械翻訳をつなぐ語彙意味論 [13:40-14:25]

影山太郎（国立国語研究所長）

言語処理や機械翻訳の進展に資すると思われる情報を提供することを主眼として、理論言語学における「語彙意味論」の考え方を日本語の具体例で平易に整理する。人間による翻訳か機械翻訳かを問わず、翻訳における不具合は、翻訳先の言語の「文法性」に関わるものと、その言語としての「自然さ」に関わるものとの2種類に大別できる。前者は当該言語として明らかに間違いであり、母語話者には通用しない。他方、後者は文法的に間違いとは言えないものの、直訳調で、当該言語の母語話者には不自然と感ぜられる。語彙意味論の理論は基本的には前者を対象とし、「単語の意味が分かれば、その文法的な用法と文全体の構造が予測できる」と仮説している。しかし実際に個々の単語の辞書的意味を見極めようとすると、どこからどこまでをその単語固有の意味と見なすべきかが問題となる。動詞、形容詞、名詞の具体例を用いて、言語そのものの知識と実世界の知識との線引きについて一定の基準を示唆する。以上は翻訳の「文法性」に関わる事項であるが、より高度な翻訳を目指すなら、当該言語としての自然さが問題になる。「日本語らしい日本語」、「英語らしい英語」を作り出すためには、それぞれの言語に特徴的な「癖」に配慮することが求められる。具体的な例を用いて、日本語として好まれる表現法（発想）と英語として好まれる表現法（発想）の違いを明確にする。

【招待講演】

4. 法廷用語を市民の手に

・・・日弁連における日常語化プロジェクトの経験から [14:25-15:10]

酒井幸（東京弁護士会弁護士）

昨年5月から裁判員制度がスタートした。この新制度発足が決まった5年前、2004年に日本弁護士連合会は、参加する市民にわかり易い法廷を実現するために、「法廷用語の日常語化プロジェクトチーム」を立ち上げた。委員の半数は言語学者、アナウンサーなど言葉の専門家や社会心理学者など法律家以外の有識者。以来3年4か月、ほぼ月1回の議論を経て最終報告書をまとめ、法律家向けと市民向けの2冊の本として出版した。

方法論も持たず、用語の絞り方から検討するというスタート。しかし、ジャンルは異なるが関心を共有するメンバーは、コラボレーションの楽しさを満喫しながら、効率的で的確な議論の進め方を次第に獲得していった。手探りで進めたこの経験をご紹介することで、同様の試みへの何らかのヒントになれば幸いである。

〈 休憩 〉

[15:10-15:25]

【取組・研究事例の紹介】

5. 日本語処理技術の研究開発における特許情報の可能性 [15:25-15:45]

藤井敦（東京工業大学准教授）

産業日本語の実現には、オーサリングツールのようなコンピュータによる日本語処理技術が重要である。さらに、産業日本語の実現によって日本語処理技術がより発展するという循環が必要である。産業用文書である特許情報と日本語処理技術との関わりについて、自然言語処理や情報検索の研究開発に携わる者の立場から最新事情について講演する。

6. 病院の言葉を分かりやすくする提案 [15:45-16:05]

田中牧郎（国立国語研究所准教授）

国立国語研究所「病院の言葉」委員会が行った、表題の取り組みを紹介する。この委員会は言語関係者と医療者とからなり、医療情報を伝える言葉をどのように運用すれば患者に分かりやすく伝わるのか、その工夫の類型と事例をまとめ、医療者に対して提案を行った。委員会における検討は、言語コーパスによる語彙抽出、医療者や一般国民に対するインターネット調査などを実施してデータを整備し、データに基づいて議論を重ねる形で進めた。

7. 特許版・産業日本語と機械翻訳向け特許明細書ライティングマニュアル [16:05-16:25]

渡邊豊英（日本特許情報機構 特許情報研究所 調査研究部長）

経済のグローバル化に伴い、海外への特許出願が益々重要となってきた。そのために膨大化する翻訳コストを少しでも下げることが急務となっており、機械翻訳を有効に活用することの必要性があらためて認識されつつある。Japio 特許情報研究所では、現状の機械翻訳をできるだけ活用して、特許明細書を効率的に英文化できるようにするためのライティングマニュアルの作成を試みている。本講演では、特許制度と特許情報の概要や機械翻訳の活用の現状等を紹介しつつ、特許分野での産業日本語の活用に向けた Japio 特許情報研究所での取り組みを紹介する。

8. 産業情報としての特許情報と産業日本語 [16:25-16:45]

横井俊夫（日本特許情報機構 特許情報研究所）

産業情報を表現し伝えるという産業日本語の役割を明確にし、産業情報の典型例として特許情報を取り上げる。日本語と日本の情報という観点と言語処理や日本語教育や言語政策などの経緯から、産業日本語の位置付けを行い、いわゆる制限言語と質的に異なる産業日本語の機能を明らかにする。そして、産業情報を代表するものとの視点から特許情報を概観する。

【総合討論】

[16:45-17:30]

【閉会】

[17:30]

目次

1. 産業日本語を育てよう -----
長尾 真 (国立国会図書館長)
2. 言語学と機械翻訳をつなぐ語彙意味論 -----
影山太郎 (国立国語研究所長)
3. 法廷用語を市民の手に 日弁連における日常語化プロジェクトの経験から -----
酒井幸 (東京弁護士会弁護士)
4. 日本語処理技術の研究開発における特許情報の可能性 -----
藤井敦 (東京工業大学准教授)
5. 病院の言葉を分かりやすくする提案 -----
田中牧郎 (国立国語研究所准教授)
6. 特許版・産業日本語と機械翻訳向け特許明細書ライティングマニュアル -----
渡邊豊英 (日本特許情報機構 特許情報研究所 調査研究部長)
7. 産業情報としての特許情報と産業日本語 -----
横井俊夫 (日本特許情報機構 特許情報研究所)